

# 学位論文の要約

題目：修辞表現と言語理解の重層性 ―認知言語学からのアプローチ―

氏名：伊藤 薫

論文要約：

本論文は、認知言語学および談話・テキスト言語学的観点から修辞表現の理解について検討し、テキストに含まれるどのような要因が修辞表現の理解に影響するかを考察することにより、人間の言語理解の一側面を探究することを目的としている。

第1章では本論文の導入として、自然言語使用の一部としてのレトリックの位置づけや、その位置づけを踏まえ、言語学的な観点から文脈を考慮しつつ習字表現を研究することの重要性について述べる。同時に、レトリックを言語学的な立場から研究することで、人間による自然言語の理解のモデルについて示唆を与えることができるという、本研究の意義について述べる。

第2章では、認知言語学、談話・テキスト言語学、修辞学を中心として、各分野において修辞表現についての記述や理論、及び修辞表現の理解に関わると想定される言語理論について概観する。認知言語学については概念メタファー理論や認知文法における記号合成に関わる理論、談話・テキスト言語学については結束性や一貫性、談話トピックなどのテキストの構成に関わる理論、及び修辞学の概念を取り上げ、後の議論の基盤とする。

第3章では、第2章で取り上げた理論をもとに修辞表現の理解に関わる要因について説明し、どのような要因が修辞表現の理解に影響すると想定しているかを提示する。本論では語彙項目をテキスト中で読み手が理解しようとするとき、複数の要因が個別にその語彙項目の意味を喚起するという想定する。これらの想定は第4章及び第5章で行う具体例の分析で取り上げる異義兼用や異義反復の理解メカニズムの説明を行う上で重要となる。修辞表現の理解に関わるこれらの要因のうち、本論では文以下のレベルに関わる要因（ミクロ的要因、ないしボトムアップ的要因）について、選択制限の違反（ないしは意味の衝突）と結束性、一貫性、談話トピックなど、談話・テキストレベルの要因（マクロ的要因、またはトップダウン的要因）があると仮定する。ボトムアップ的要因としては、記号合成の過程で精緻化がなされる際に、対応する要素が整合的なドメインで解釈されなければいけないという、Croft (1993)の言うthe unity of domainと同様の立場を取る。また、トップダウン的要因については、上に挙げた各要因は読み手がテキストに対して抱く期待と密接に関連し、テキスト中の語彙項目についてこれらの要因が

ら喚起される意味は、それが結束性を維持する解釈であるという期待や、前後の文につながりが感じられるという期待、それまでの談話トピックに沿うものであるとの期待に合致する意味であると仮定する。

第4章では修辞表現の事例研究としてメタファーを中心に、メタファーと深く関わる隠喩クラスター、異義兼用、異義反復について、それらの複雑な意味がどのようにして理解可能になっているかを検討する。ボトムアップ的要因との関わりについては、メタファー的解釈を認知文法の記号合成モデルの中の精緻化と関連付け、意味の衝突を回避する際の手段の一つとしてメタファーを位置づける。このことの理論的な妥当性については、メタファーとオクシモロンが両立することを挙げ、前者が意味の衝突の回避手段である一方、後者が衝突の種類であるということを論拠にしている。また、トップダウン的要因からは、意味の衝突を含まないメタファーを中心に考察し、様々な文脈から喚起された意味が修辞表現の理解に影響を与えていることを示す。このことの実例研究として、隠喩クラスター（テキスト中に一定のまとまりを持って出現する一連のメタファー）と異義兼用を対象に、それらの文脈を分析している。このうち、前者ではトップダウン的要因とボトムアップ的要因の双方が同じような意味を喚起するのに対し、異義兼用ではトップダウン的要因とボトムアップ的要因によって異なる意味が喚起され、ユーモラスな効果がもたらされると主張する。この結果は、テキストの解釈について読み手が持つ期待のうち、一部が期待に沿っており、一部が期待に反するものであることを示している。加えて、量的手法によってテキストにおける語義の一貫性についてメタファーコーパスを用いた調査を行い、テキスト中である語彙についての語義がメタファー的であるか非メタファー的であるかについて一貫していることが期待されることを示す。

第5章ではメトニミーを中心としながら転喩や異義兼用について取り扱い、それらの表現を理解する際に、第3章で提示した各要因がどのような影響を与えているかを考察し、メトニミーの解釈基盤となる隣接性の構築過程や、メトニミー的意味の語用論的な定着について説明した。ボトムアップ的要因については、表現の統語レベルと修辞表現の種類が密接に関わっており、狭義のメトニミーが名詞を中心とした「モノ」に関わる修辞、転喩が動詞句以上のレベルと深く関わる「イベント」に関わる修辞であることを主張する。また、トップダウン的解釈については、テキスト中で構築された隣接性が個々の文の解釈にどのように影響するかについて、結束性を中心にそのメカニズムを説明する。一般的に、名詞の指すカテゴリーに共通する属性ではなく、特定の個体（インスタンス）のみが持つ属性は、個体に関する知識が共有されていなければその属性を利用したメトニミーは成立しないが、小説のような事前の知識の共有が困難なテキストにおいては、個体に関する隣接性がテキスト中で構築された後、結束性によってテキストを通じたメトニミー的解釈が可能

になることを示す。加えて、小説の中で描写されている場面に関して十分な情報が与えられている場合には、頻繁にメトニミーのターゲットが入れ替わっても十分理解が可能であることについて示す。また、量的な手法を用いた研究として一つの小説を通じた語彙のメトニミー的使用に関する調査を行う。その結果、創造的なメトニミー表現であっても一旦メトニミー的意味が定着すれば、その小説においては安定してメトニミー的意味でその語を使用することができ、定着した意義を用いて異義兼用的な使用も可能であることを示す。

第6章では、第4章および第5章で行った具体例の考察から得られた知見を総括し、トップダウン的要因とボトムアップ的要因についての評価を行う。具体的には、文を整合的に解釈する必要がある、というボトムアップ的要因と結束性や談話トピックなどのトップダウン的要因の相互作用について、前者が強い要因であり、弱い要因である後者が介入するときいわゆる洒落のような修辭的效果を生み出すことを主張する。この主張は、修辭表現の理解には少なくとも本論で提案されたトップダウン的要因とボトムアップ的要因によって喚起された意味が重層的に理解されていることを示している。加えて、概念メタファーを示す際に用いられるコピュラ形式の構文によって提示された枠組みによってメトニミーの理解が可能になるという、メタファーとメトニミーが相互作用している実例を挙げ、テキスト中で創造的な修辭表現が理解可能になることについて示す。

第7章は論文全体の総括と展望について述べる。修辭表現の理解に影響を与える要因は複数存在し、それは自然言語のもつ冗長性や堅牢性とも関連していると解釈する。そして、それらの冗長性や堅牢性を利用しながらも、その一方で規範的な言語から敢えて逸脱する部分を作ることによって人間は創造的な言語使用ができることを示唆し、本論文の結論とする。